



Title	<書評>「サラダ記念日」（俵万智，河出書房新社，980円）
Author(s)	蒲，公英
Citation	大阪公衆衛生. 1987, 52, p. 24-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83748
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「サラダ記念日」

俵 万智（河出書房新社 980円）

“「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日” 初々しい感性である。情景を言葉にする、心情を歌にする、ただこれだけのことだが、一つ一つの言葉がキラリと輝いて真直ぐ心に入ってくる。

「野球ゲーム」が昨年の角川短歌賞で次席になり、次いで「八月の朝」が昨年の第32回角川短歌賞受賞作となって、歌壇の話題をさらった。それ以後、与謝野晶子以来の大型新人誕生と騒がれ、話題の輪は次第に大きくなっていった。

弱冠24歳、高校教師の彼女、その彼女の歌の何が人を魅了するのだろう。国語定型の文体の新しさ、感性の鋭さが……。

あるいは溢れる恋心を、また、ある時には、誰もが味わったことがあるであろう失恋の切なさを、彼女は鋭く切り取っていく。

彼女の歌の受読者に若い女性が多いのは、凝縮された感性の中に、ありのままの感情が歌われているからではないだろうか。彼女の歌に自分自身を投影し、共に感ずることが出来るから、多くの人に読まれるのであろう。

“なんでもない会話 なんでもない笑顔
なんでもないからふるさとが好き”

“陽のあたる壁にもたれて座りおり

平行線の吾と君の足

彼女は言う、「なんてことない毎日のなかから、一首でもいい歌を作っていきたい。それはすなわち、一生懸命生きていきたいということだ。生きることがうたうことだから、うたうことが生きることだから」と。

読み終えて、歌がとても身近に感じられ、私も作ってみたくなった。

“街並みも人もかれるもふのさとの
星空のみは幼き日のごと”

（蒲 公英）